

今後の不登校支援のあり方に関する検討委員会 議事録 [概要]

<登校しやすい環境整備と不登校の早期支援>

□ 不登校児童生徒の増加要因・背景

- ◆不登校児童生徒の増加要因・背景について、今般の増加はコロナ禍が大きな要因で、これが学校教育、学校での生活を激変させた。学校だけでなく世の中の様々な価値観を変えてしまった。原因は何かということではなく、不登校は問題ではないし、その子供の成長にとって必要な時間を過ごしていると言っても過言ではない。
- ◆唯一絶対の原因があるわけではなく、いろいろな要因が絡んでいる。また、不登校になりかけの頃と定着してから、その段階によっても要因は変わっていく。決めつけて終わりにならないことが大事である。

□ 不登校支援のあり方に関する基本的な考え方

- ◆教育機会確保法の大事な理念がきちんと伝わっているか。それを運用するにはどうしたらいいかというところに課題がある。不登校は問題ではないと国が示した一方で、問題ではないから何もしなくていいというのではなく、その差をどうやって埋めていくか。社会的自立という大きな目標も具体的にはどうしたらいいのかという迷いが学校現場から聞こえてくる。長期的な社会的自立もあれば、短期的に自立に向けて今必要な支援もある。長期的・短期的という両方から検討しないといけない。
- ◆中学3年のときに自分の意思による進路選択をどれだけ支援できるか。子供の思いを大事にしながら、上手に悩み、本人の意思で決めていくこと（自己決定、自己選択）が社会的自立の一步になる。
- ◆不登校をどう捉えるかが大事。不登校自体は問題ではない。あくまでも子供たちからのサインであって、その裏に何があるのか、何が彼らをそうさせているのかという視点を持たないと子供が理解できない。そういう立場や視点に立って、進めていかなければならないことを共通理解しないといけない。
- ◆学校現場の教員が「意見のまとめ（報告）」をしっかり共有して、子供達に対応していく際の指針にするためにも、研修の機会を設定し、全ての教職員に周知すべき。今後、活用が進んでいくことを期待したい。
- ◆これまで学校は、学校復帰中心の対応だったと感じている。保護者も子供が不登校になった時点で孤立していたり、本人も学校に行けないことに関して罪悪感を持ったり、保護者が過敏になったり、「とにかく学校に戻らない」という思いが強い。子供には、集団がそもそも難しかったり、学校の空気が苦手な子供がいる。無理にではなくて、子供が一体何を求めているのか、一体どうしたらいいのかというところに寄り添わないといけない。
- ◆学校復帰しないとけないというより、不登校自体が問題ではないということ、子供とその関係者が共有していることが大事。
- ◆不登校になったとき、家庭訪問についても、きめ細かく一人一人を見ていきながら、本人のそのときの状況や気持ちを尊重することが重要。
- ◆人との出会い、本人にとってのキーパーソンになる方との出会いが大きなポイント。その中で本人のニーズに合ったサポート、支援をしていく。本人が求める支援をどのタイミングで行うかが大事。
- ◆一人一人にオーダーメイドの支援が必要で、そのためには、不登校の子供たちをどう見立てるかというアセスメントの力が学校に必要とされている。
- ◆不登校だからではなく、子供のアセスメント、子供を理解するという出発点に立ち戻らないといけない。不登校児童生徒の状況は様々で、一般的にこうですと言えない。教員だけでなく、保護者も含めて、いろいろな専門の方の力も借りての支援が必要。
- ◆担任の先生と本人との関係だけにならないように、チーム学校として先生方のコミュニケーション、孤立しない方法、学校が内向きでなく、学校外の専門機関やSC、SSW、地域のフリースクール等とつながることが児童生徒の支援にとって大切。
- ◆連携と協働、互いの気づきを生かしながら、それぞれの専門性や役割を互いに尊重し合って、協力して働くコラボレーションが大切。児童生徒、保護者を中心に据えて何ができるか、互いに尊重しながら手立てを作っていくことが大事。
- ◆中学3年生になると進路の負荷がかかってくる。中3の不登校の子供たちにとっての負荷の大きさは考えておく必要がある。
- ◆それぞれの子供に合った進路。中学校から高校への進学時、通信制高校の情報があまりなかったという意見があった。中学校での進路指導の際、先生方も通信制高校について具体的なイメージを持ってほしい。

また、高校で登校できなくなって転学することが増えている。高校での転学の際に、丁寧に次につないでいくことが、学び続ける力になっていく。

- ◆多様な学びの場への進路指導や進学相談が中学校の機能として重要になる。幼小中と次の高へのつなぎ、社会へのつなぎも重要になってくる。
- ◆これまで行ってきた不登校対策、いろいろな専門の方々とともに連携協力してやってきた。やはり、日本の学校教育の根本的見直しとよさの再認識という意味では、少人数学級をいま一度、考えないといけない。
- ◆いろいろな先生がそれぞれの個性を認め合い、また、生かしながら、一人一人の意見を尊重して対等な立場で組織としての意見を形成していくことが高度な連携に繋がるのではないかな。

□ 不登校になったきっかけや継続理由の的確な把握

- ◆アセスメントをしっかり行い、支援プランを立てる。その中に保護者の思いも記載し、一緒に作っていく。アセスメントとともに、校種間の情報共有、学年が進む際にこれまでの状況の引き継ぎ等、児童生徒理解の取組の強化が必要。
- ◆要因やきっかけ、理由というのは、確かにそれを明らかにして解決することは大事だが、一方で本人たちに聞くことによって追い詰めてしまったり、何か悪いことをしているというメッセージとして伝わってしまったりすることもある。それを子供たちとどのようにやり取りするか、そこだけにこだわらない関わり方が必要。
- ◆学校復帰を求め過ぎるところがある。学校復帰はあくまで子供たちが選ぶ結果で、アセスメントや支援策を考えたときに、子供が中心におらず、大人たちのアセスメントで子供たちとずれていることが多い。この子供は学校に戻りたいのか、それとも学校復帰を今は求めているのかという、子供本人を中心に据えて支援していくことが大切。子供の思いに沿ったアセスメントでなければ、どんなアセスメントも、子供たちからずれていく。
- ◆支援シートは大変重要な切り口。支援シートを神戸市で作っていく際、支援シートは保護者の意向も入れながら一緒に作っていくという視点が大変重要。
- ◆担任や学年の見立てだけでなく、きちんとしたアセスメント、分析は必要で、問題が深刻化する前にチームによるアセスメントを専門的な意見も入れながら、多様な視点で行うことが大事。
- ◆1つのきっかけから学校に行かない、行けないという状況が起きているという捉え方を改め、一つ一つのケースに対するアセスメントをしっかりして、解決に向けての支援を保護者、教師がチームとしてどのようにやっていくかが重要。
- ◆アセスメントは1回では終わらない。できれば学期に1回くらい、支援も見直していくことが一般的。子供達がこういう支援で変化があったとか、今後こういう形で支援しようとか、それらが次の学年の計画的な支援に繋がっていく。また、アセスメントシートに保護者の思いや子供の思いが入り、総合的に考えていくことが大事。
- ◆背景や理由は分かりたいと思うが、やはり子供理解が重要。決めつけないこと、問題として捉えず一緒に考えていく中で理解を深め、この子供にとってはこういうことがあったんだな、こういうことがこの子にとって大きく響いたんだなということを、その都度、個々で見えていくのが一番大事。
- ◆当然、児童生徒の思いや状況が変化することもある。途切れない支援を続けていくためには、アセスメントや支援の実行、結果を振り返って、必要に応じてアセスメントを見直していくことが大切。
- ◆学校で学ぶことのメリットも大きく、支援を行う中で、学校復帰よりもこの子供にはもっと大切なことがあるというようなアセスメント結果ならば、それに合わせて支援の手立てを変えていくことが必要。
- ◆アセスメントシートはいろいろな視点から作られた方が良い。基本的にアセスメントシートは、担任だけで作るものではなく、例えば、学年の教師や支援員、もちろんSCや、場合によってはSSWも含め、全員で作っていくもの。学校外で連携する機関の意見も反映できれば望ましい。ただ、そこに時間をかけてしまうと難しいので、ボリュームと作成に要する時間の兼ね合いを考える必要がある。

□ SC・SSWを含む関係者間の情報共有と組織的支援

- ◆できるだけ早い段階でSCが保護者、本人に会えると、生活環境や本人の思いがとれる。それを必ず先生にお返しして、その上で支援を考えていくチーム学校にできるだけ参画するようにしている。
- ◆学校内で事案に関係する教職員がそれぞれの専門性、役割を理解して、普段から連携していくことが、SCや

SSW の活用につながる。

- ◆いかに情報連携を行動連携にしていくかが大事。そして、学校の教員の中で情報をうまく行動に移していくコーディネーターが必要。
- ◆教育だけの解決は難しい。教育的支援だけでなく、心理的な支援、最近は福祉的な支援も大事になっている。事案によっては司法、行政の力を総動員して対応していくことが必要。他職種連携やチームでの支援がより大事になる。
- ◆専門的な言葉の意味について、保護者や学校現場の教員に理解されているかということに懸念がある。例えば、コンサルテーションは連携の手法であり、この言葉を「互いの専門性や役割も含めた違いを尊重し合いながら、当該児童生徒を中心に据えた率直な意見交換や具体策を構築していくこと」と言い換えるなど、平易な言葉で記載した方が実践しやすい。

□ 魅力ある学校づくり等の学校の取組のあり方

- ◆「魅力ある学校づくり」や「社会的自立」という文言について、一層具体的にイメージしやすい形で目標として持っておくことは、その目標の達成に向かいやすい。
- ◆魅力ある学校づくりのためには、学級、学年で子供を認める、その子供に寄り添う、話をよく聞いて、褒めるといったことを地道に積み重ねていくことが大事。
- ◆学校自体が登校しやすい環境であることはもちろん大事。これは未然防止も含め、全ての子供たちに必要。また、しんどくなる前、あるいはちょっとしんどいときにSOSが出せる、いつでも相談できる、安全・安心な学校は不登校に限らず、全ての子供達に必要。学校を全ての子供たちにとって安全な場にしていくのは大前提。また、子供たちのSOSを先生方、周りの大人が上手に受けるという体制づくりも大事。
- ◆是は是、非は非でしっかりと自分たちを守ってくれるところは守ってくれる、盛り立ててくれるところは盛り立ててくれる。そういう先生を期待しているという部分も魅力ある学校づくりになる。
- ◆先生だけではできないこと、手が回らないことがたくさん出てきている。保護者や地域の方々にも学校運営に参画してもらっている。本校では大学生が放課後学習に入ってもらう体制をつくり、先生以外の様々な方に子供たちと一緒に学んでもらうといった機会を増やしていくことが魅力ある学校づくりにつながるのではないと思う。

<不登校児童生徒への支援の充実>

□ 神戸市立青少年育成センターの果たすべき役割

- ◆青少年育成センターは、不登校支援だけでなく、青少年の健全育成など様々な目的も担っている。青少年育成センターとフリースクールは、不登校支援という点で同じところを目指している。分担できるものは分担し、互いに協力すべき。
- ◆くすのき教室は不登校生の受け入れとともに、教育相談という役割もある。不登校の前段階で連携し、子供の情報やアセスメントにつなげて支援できればより効果的。校長や生徒指導関係教員が気軽に来所し、現場の悩みに相談機関として携わりながら、不登校児童生徒への効果的な支援ができればと感じている。

□ 現在、不登校支援を行っている「くすのき教室」における支援内容・支援体制等

- ◆市内7か所の分室は、交通の便の良い場所もあるが、北区は結構不便で、利用希望は多いが、なかなか通所できないということがある。このことを解消するため、くすのき教室を拡充することも選択肢の1つ。
- ◆取組をもう少しプログラム化して、構造的に対応していくことが必要。アセスメントによって支援プログラム・個別支援を充実させながら、学校の役割、くすのき教室の役割、行政の支援で子供たちの困り感やニーズに合わせた支援を行い、関係が作られる中で多くの選択肢ができ、一緒に考えながら、次にどこを活用するかという広がりを見せればと感じている。
- ◆くすのき教室の役割に、オンラインによるつながりの場の創設を、ぜひ検討してほしい。くすのき教室にスタジオを作り、スタジオ教室という方法ができれば、支援の選択肢が広がる。
- ◆小学生は、青少年育成センターときたすま分室で受け入れているが、高学年の子供の受け入れが多い。低学年の子供は、そこでの学習内容や保護者送迎もあり、なかなか受け入れ先が見つからない。くすのき教室の体制整備が必要。

□ ICT等を活用した支援方策

- ◆不登校の子供たちへのオンラインでのサポートは有効。広島県では、かなり効果を上げている。

- ◆Webでのオンライン授業を設定してほしい。様々な学びの保障という点で、リアルタイムだけでなく、オンデマンドで教材集を各学校や家庭で活用するような手立ては有効ではないか。

□ 校内における不登校支援

- ◆小学校では、別室での支援が場所的・人的に難しい。保健室や校長室で対応する場合もある。学校だけでは困難。地域はもちろん、フリースクールを含む全ての機関との連携が大事。
- ◆大学では教育実習や臨床心理士になるための現場実習が必要で、その実習先を探すのに悪戦苦闘している。そういったところと連携できれば、子供に若者の活力が伝わるという効果も期待できる。そういうシステムの構築も考えてほしい。
- ◆「別室」という言い方を「〇〇教室」に変え、子供たちに、いかによりよい環境を提供できるか。「放課後の学びの場」には、人的・時間的に先生が入るのは難しいため、オンラインで大学生とつながる形ができないか考えている。

□ 不登校特例校等を含む多様な教育機会の確保

- ◆岐阜市立草潤中学校（不登校特例校）は、不登校支援の中核施設としての役割を果たしている。地域や学校現場への成果の還元という点で大変意味深い。そこで得られた知見を各学校にも生かしていくことができると、すごく発展性がある。
- ◆教育の中だけの連携でなく、もう少し広くいろいろなセクションと連携し、そこにフリースクールやNPOの力を借りることで、子供たちの選択肢は広がる。学校教育にしんどさを感じる子供もゼロではない。子供たちが自己決定できるように支援できる居場所づくりを考えてもいいのではないかと。特に小学生の居場所の確保が大きな課題。
- ◆子供に寄り添った不登校支援は大事だが、安心・安全な居場所といっても、個々によって異なる。また、社会的自立も、好きなことや得意なことは子供によってそれぞれ違う。このため、教室における配慮で可能な場合もあるが、校内の別室での支援やくすのき教室、不登校特例校、フリースクール、ICT等を活用した学習支援など、子供が自分の状態に応じて選べる選択肢をできるだけ充実させていくことが大切。
- ◆多様な選択肢として、まずは地域の学校、フリースクール、それからセンター的な役割を果たしているくすのき教室。そこにICT的なスタジオを作って、通えない子にもつながるような4つ目の選択肢としてはどうか。その選択肢の中で子供がここで頑張れる、ここで学んでみよう、この方法でやってみようとするのは、最後は子ども自身。
- ◆神戸市には、他の自治体の実践を参考にしながら、できる限り多様な選択肢が提供できる方向性を生み出してほしい。

<保護者サポート及び民間施設等との連携推進>

□ 不登校児童生徒の保護者向け支援の充実

- ◆保護者サポートは大変重要。不登校になったときに子供たちと同時に保護者もすごく自分を責めたり、原因を求めて学校に相談されたりする。不登校の子供に加えて保護者が不安定になるケースが多い。
- ◆保護者が安定することが、子供たちにすごくいい効果が及ぶ。保護者をどう支えるのか、どこで支えるのかという、保護者支援の体制を構築していかなければならない。
- ◆支援の情報が子供や保護者に分かりやすく伝わっているか。不登校にはいろいろな子供がいて、困り感も様々で、多様な情報を含む支援が必要。
- ◆不登校支援策や、親の会、フリースクールなどの情報が、保護者の視点でうまくホームページにまとめられたら、情報提供がうまくいくのではないかと。その際、選択肢として、神戸市の他部局で不登校児童生徒を対象とする支援、例えば、福祉局のICTを活用した学習支援事業やひきこもり支援室、こども家庭局のこどもの居場所づくり事業とのリンクを貼るのも1つの方法。
- ◆当事者の声を聞く、互いに意見を交わせる機会があれば良い。

□ 教育相談窓口を通じた支援

- ◆保護者が、どこに相談したらいいか、誰に相談すればいいか、とても困っている。
- ◆ワンストップ型の相談窓口を設けて、そこに相談すれば、さらに適切な相談窓口や関わってくださる団体を紹介する。あるいは、神戸市には特色あるたくさんの方の相談窓口があるが、互いに連携して、このケースについてはこちらの窓口の方がいいというように紹介し合える、それぞれの特色を認め

合って連携する体制づくりを今後求めたい。

- ◆保護者に一番近いのが学校。不登校児童が増える中、どこに相談したらいいのかということが明確になれば、保護者も教員も分かりやすい。

□ フリースクール等の民間施設との連携

- ◆民間団体や教育支援センターなど学校外の機関との連携は欠かせない。ただ、フリースクールは、経費がかかるという現実的な問題もある。福岡県などフリースクールに補助金を出す自治体もある。神戸市も補助金を出して、学校とフリースクールが連携し、どちらにも通えるという対応が必要。また、専任教員や加配教員の配置も簡単なことではないが、対応する先生がいるのは大きい。
- ◆教育支援センターやフリースクールでの出席扱い、そこに通った、学習したことが形として認められる方向を一層進めてほしい。
- ◆学校現場はいじめや不登校などさまざまな課題がある中で不登校だけに注力することが難しい部分もある。民間団体にノウハウがあるのであれば、委託や緩やかな研究連携というところから分業を考えていくことがいいのではないかな。
- ◆これまで、くすのき教室を紹介しているため、フリースクールと距離を置く学校がたくさんあった。くすのき教室で全ての不登校生に対応できないならば、フリースクールを紹介するなど、もっと連携できるようにしてほしいのではないかな。

【臨時委員聞き取り内容】

□ 第2回

- ◆自分の人生の中で一番の経験は、「くすのき教室」に通ったこと。いろいろな人と出会い、様々な体験をすることができた。自分の視野を広げ、成長することができた。重要なことは無理に学校に行くことではなく、自分が安心する場所をつくること。

□ 第3回

- ◆子供が不登校になった当初、無理やり起こして引っ張って学校へ連れていく日が続いた。子供はパニックになり過呼吸を起こすこともあった。毎朝の学校への連絡に対してストレスがすごくあった。親の方が焦って子供を追い詰めていた。
- ◆通信制高校の情報が少なく、インターネット等でいろいろ探して、やっと公立の通信制高校に進学した。通信制高校の情報を子供たちに伝える機会があれば良い。
- ◆今、親としてのあり方を振り返ると、不登校は悪い、何とか学校に戻さなければという強い考えは、親自身がずっと思っており、その考え方に影響を受け、子供は自分を責め続けていた。不登校イコール悪いではなく、環境を変えて不登校を人生の経験として前向きに捉え直せたことが、子供にとって大きかった。
- ◆フリースクールで、不登校は悪くないという考えに触れ、実際に見違えるように活力を取り戻した2人の子供を見ていると、不登校の子供自体が問題ではなく、子供を取り巻く学校や社会と、子供たちが本来持っている特性が合わないことに気付かされた。ぴったり合う環境に入れば、子供たちの心境も変わり、潜在能力を発揮する。その意味で、教育の多様化がもっと広がってほしい。
- ◆学校教育の枠を超え、子供たちが広く一人一人に合う教育を受けられるように、情報提供やフリースクール等の学校外教育施設への助成金も、いずれは実施してほしい。

□ 第4回

- ◆民間の学びの場や親の会に関する情報を得る手段が少なく、情報収集に苦労している。親の会や子供の居場所リストを作成し、学校や公的機関で必要とされる方に情報提供できるシステムをつくってほしい。
- ◆親の会を運営する上での課題は資金。教育目的に限定したクーポンを各家庭に配布する（教育バウチャー制度）などが最も迅速に対応できる支援策ではないかな。
- ◆公的な場、特に学校での親の会の開催は有効。教師やSC、SSWを交え、不登校の悩みを話し合い、不登校関連の情報提供を共有する場ができれば、当事者の孤立を防止することができる。
- ◆学校現場では、教育機会確保法を知らない先生もおり、学校復帰が第一目標となって、先生方の働きかけと当事者の気持ちにすれ違いが生じている場合も少なくない。先生方の理解を深めていくことが重要。
- ◆不登校支援には2つの柱がある。1つは、今困っている当事者への迅速な支援。フリースクールな

ど、多様な学びの場、子供の居場所への理解と経済的支援、相談、情報提供システムの充実。もう一つは、学校教育自体の見直し。子供たちにじっくり向き合うための少人数学級システムや教師の増員、また一方的に教える授業から子供たちが主体的に考えて参加できる授業への転換。いろいろな子供の個性が混ざり合うことを常としたインクルーシブ教育。

- ◆魅力ある学校づくりとは、一体何を目指しているのか。誰がどうやって決めるべきなのか。魅力ある学校を考えると、子供たち、先生、保護者、地域と一緒に考えていくことが望ましい。
- ◆神戸市立中学校には約7割の学校にフリールームがあるにも関わらず、小学校にはほとんどない。また、中学校のフリールームも、いつでも誰でも利用できるという活用がされていない。疲れたな、しんどいなと感じたときに、先生と相談し、過ごす場所を決められるような仕組みが理想的。
- ◆教育委員会と当事者との定期的な懇談の機会を作り、具体的な対策を推進してほしい。